

「追悼、全力少年…」

明星学園 宮下 智

A男さんが亡くなった。享年五二才、血液検査で白血球と血小板の異常な減少が確認されてから、わずか数ヶ月の闘病の果てのできごとだった。重度の知的障がい、そして多動症、さらに重篤なてんかん発作、さらに四十才代になってからの車椅子生活、その何もかもが彼の生きる道を険しいものにしていった。

この数ヶ月間、母と姉は足繁く彼の入院している飯田市内の病院へ通った。高速道を利用しても一時間以上の道のりだが、大好きだった母親手作りの卵焼きを携え、好物のプリンを食べてもらいたくて通った。そんな母親が病室に入室するとA男さんは、点滴の刺された腕を上げて頭を母親に向けた。

「ほら、僕、良い子でしょ。看護師さんの言うことを聞いて、ちゃんと動かないで点滴を打っているよ」、そう言っているかのようだった。

もちろん彼は、重度の知的障がいのせいで、ひと言の発語も無いのだが、そんな彼の行動に母親は、「園長さん、本当にA男はお利口さんになったよ、ありがとね、こんなにお利口にしてくれて」とまっすぐな褒め言葉を与えてくれるのだ。

前年、亡くなった父親が、体調を崩し始めた十五年ほど前、彼の自立を巡って相談があった。

「これからいつまでA男の面会に来れるかわからない。場合によったら近々帰省も難しくなるかもしれない。そうしたら今から会う回数を少しずつ減らして、会えなくなることに慣らしていった方がA男が自立できるのではないかと。」と。

私は、自信をもって答えた。「お父さん、実は逆なんですよ。会いに来なくなるのではなくて、今のうちにできるだけ会いに来て下さい。いつ会えなくなるかわからないからこそ、会いに来て欲しいのです。会えなくなってから、あの時、会いに行っておけば良かったと悔やむことよりも、これだけ全力で会いに行ったから、やれることは全部やったんだと思えた方が良いでしょう。全力で面会に来てくれていたその姿が、A男さんの心の中に素敵なお思い出として、お父さんがたとえ亡くなった後にも、しっかり残って、それが自立のエネルギーになるんですよ。」日頃から歯に衣着せぬ会話していた二人の関係があってこそ言えた言葉だったが、頑固で言い出したらなかなか自説を曲げない父親が、その時ばかりは即座に「わかった、じゃあ、園長の言う通りにしよう」と返答があったのをくっきりと思い出す。そしてその約束通り、体調が少しずつ悪くなっていくにもかかわらず定期的な面会や帰省をその後ずっと続けて下さったのだ。

頑固親父の血を引いた頑固息子の方とは言えば、こちらの意思の強さも半端じゃない。あるとき彼は忽然と食事を拒否し続けたのだ。ちょうど母親が腕や足を痛めたときで、車椅子のA男さんを介助するたびに、母親の口からは「痛い、痛い」という言葉が、父親の口からは「重いなあ、どっこいしょ」などと嫌が上でも声が漏れ始めていたころだった。A男さんは考えた。今の自分で、両親を助けるためにできることは何かと。出した結論は、食事を食べることをしないで体重を減らすという選択だった。体重が少しでも軽くなれば、両親の身体への負担を少なくできる。いわば命を懸けての選択だったが、自分の幸せよりも両親の幸せが彼にとっては優先事項だったのだ。両親は、彼のために身体のあちこちが痛いのを堪えながら面会に来る、子は両親のためを思い、食事をとらないで体重を減らそうとする。親は子の幸せを思い、子は親の幸せを願う。が、お互いに良かれと思うことが擦れ違う。

頑固者の彼の出した結論を翻さすのはなかなか困難を極めた。職員は伝えた。「A男さんは、親思いのやさしい人なんだね。お父さんやお母さんのことが大好きなんだ。良くわかったよ、お父さんも、お母さんも、あなたのやさしさ、とっても嬉しかったと言ってたよ、でもお父さんやお母さんの一番の安心は、あなたの体重が減って、介助が楽になることではなくて、あなたが好きなものを一杯食べて健康で元気に学園で暮らしていることなんだよ。体重が減ったら病気でもするのではないかと心配させちゃうことになるんだよ。少々体重が増えたって、まだまだ任しとけて言ってたよ、痛いやどっこいしょだって、介助することがイヤで言っているわけではないんだよよ、A男さんのこと大好きって言っていたよ」

父や母からも同じような内容の話が直接伝えてもらった。「そんなこと、うちの子が考えることができるよう

になったのかえ？」半信半疑の言葉だったが、これで彼の食事拒否は無くなった。

そういえば、それに遡る十年ほど前にも彼には食事をとらないことがあった。原因が良くわからなかった私は、ご両親と本人を囲んで話す時間をとらせて頂いた。

私「いつ頃から、ごはん食べなくなっているのかなあ？」

母「この春からだと思うがな…、担任の先生、退職しちゃったしなあ、A男は、大好きだったと思うだよね、あの先生。とっても良くしてくれたし…」

私「そうなんですか？A男さん、お母さん、そう言ってますよ。食べないのは、担任の職員が辞めちゃって寂しいからじゃないかって…怒っているのかな？」

A「…（ニコっと微笑む）…」

私「お母さん、A男さん、今笑いましたよね、そうだって言ってますよ」

母「お父さん、A男が笑ったよ、良く話がわかるんだよ」

父「そんな話、わかるわけがないじゃないか、俺には笑ったようには見えなかったぞ」

ちょっとちぐはぐなやりとりだったけど、A男さんは、ご両親になんとなく自分の気持ちが伝わったような気がして嬉しかったに違いない。

その後、退職した職員と連絡を取り合って、退職したのはA男さんのことが嫌いになったわけじゃないこと、学園の仕事は大好きだったこと、今は、次の人生の目標に向かって頑張っていること、またA男さんに会いに行きたいと思っていることを伝えてもらった。

彼はこうして、また食べ始めた。

※ ※ ※ ※ ※

彼が、幼き頃に入所してから四十有余年、彼が暮らした明星という地は、いったい何を彼に与え続けた場所なのか？

母は言う。「この数ヶ月、病院に通って、こうしてA男といろいろな話ができて…、ずっと学園に任せっぱなしだったからねえ、最後の時間、短かったけど、神様がこの時間を与えてくれたんだと思うだよね…」

姉は言う。「お見舞いに来てくれるたくさんの職員の方が、A男さんは、キーボードが好きなんだよね、このぼり大好きなんだよね、旅行楽しかったね…、A男が好きなことをいっぱい教えてくれて、私以上のことを知っていて、私以上に楽しいことを一緒にしていて、本当に明星というところはA男にとって家族だったんじゃないかと…」

彼は車椅子生活だったが、外出時の買い物の選択で、白いスニーカーを選んだことがあった。その選択は私たちにとっては、ありがとうという感謝の気持ちやごめんなさいという謝罪の気持ちさえも障がいがあるがゆえにじょうずに伝えられない彼らだが、また歩けるようになりたいという希望を伝えているように映った。

葬儀の日、塩尻峠は雪が舞った。父や母はこの四十有余年の間、何回となく息子の喜ぶのこだけを思い、この峠を越え、あるいはトンネルを抜け、この飯田の地へ通い続けたのだ。A男さんに「大好き」を伝えるために。そして、私たちは、どれだけA男さんが父や母に「大好き」を伝えることを応援できたのだろうか？そして、また歩けるようになりたいという希望にどれだけ応えることができたのだろうか？

いささか自信はないが、少なくともこれだけは、言えるだろう。「大好き」を伝えたい気持ち、また歩けるようになりたいという「希望」を持てる気持ちを育てることができたのではないかということ。さらば、全力少年！お疲れさまでした。安らかに…。

WELCOME TO SATORU WORLD

障がい者支援施設明星学園における心のケア

<http://myojo-satoru.life.coocan.jp>

Facebook : <https://www.facebook.com/satoru.miyashita.1>